Make Dreams Real
夢をかたちに

2008-2009年度
国際ロータリーのテーマ

奉仕の理想

―ロータリーの心と形―

朗太君

R―第2760地区ロータリー愛知82
2008年度ガバナー
片山 主水

目次

徒然十語

一　聴天超我　①
二　我仏隣宝　④
三　還元祝と双六祝　⑦
四　三俳人の再評価　⑩
五　ロータリーはモーツアルトの音楽のごと　⑭
六　我亦在彼摂取中　⑰
七　七清華　⑲
八　詩歌のリズム　㉗
九　名古屋城検定　㉛
十　防毛録　㉟

徒然十語の一

聴天超我

敬天愛人は西郷隆盛の晩年の処世座右の銘です。則天去私は夏目漱石の辞世時の境地です。滅私奉公は戦時の政府筋のスローガンです。これらの四字熟語の構成は、天・公等と我・己等の対比される一対と、それらを目的とする二つの対比される動詞一対の組合せでできています。

私も、恐れずその顰み（ひそみ）に倣って、一方を天の道理・天意を聴く「聴天」とし、他方をロータリーの標語の一部を拝借して我執を越える「超我」とし、二つ合わせて「聴天超我」のロータリー座右の銘を開発してみました。

意味が番重要なことは当然ですが、一字一字の画数のバランスと音律にも気配りした結果です。

自分だけの善語を、雨読の日曜日にでも造ってみる。こんな優雅な頭の体操はありません。

参考までに、試作例と使用漢字候補を次に挙げておきます。

楽天忘我　奉天放我・・

己我吾私身自

奉応承順拝参戴聴報楽遵崇祐従随敬尊則服仰

無去滅越超空捨制棄脱節停抑御止除減抜削消虚忘慎

◇◆　◇◆　◇◆　◇◆

その前に誉れあらんよりは、
その後ろに誹りなきにいずれぞ
その身に楽しみあらんよりは
その心に憂なきにいずれぞ

第一句は

生きているうちに称賛をあびて気分がいいというよりも、称賛はなくても死後に陰口を叩かれることがない方がいいように思いますが、さあ、あなたはどう考えますかという意味です。

次の句は、

楽しみが多くあるよりも、楽しみが無くても心配事が一つもない方がいいと思いますが、さあ、あなたはどちらをとりますか。

両方ともいい言葉です。唐宋八大家の一人に数えられる中唐の文学者韓愈の文の一節です。文の内容ばかりではなく、日本の文章にはない、漢文独特の読み下し文の格調と、構成・対比の技巧があります。

皆さん、また倣って自分自身の座右の善語を作ってみませんか。後記の様な三つの対比語の組合せから成っています。習作を次ぎに掲げます。

五濁悪世に生れて、座禅を組んで荒波を立てず欲を滅却しまた少欲にして一生を過ごすのと、苦労を厭わず生き甲斐を求めて積極的に生きるのと、あなたならどちらを採りますか。

坐して五欲を滅せんよりは、進みて五濁を救わんにいずれぞ

もう一句。

若きに財あらんよりは　老いて借シャクなきにいずれぞ

反歌

若きに財ありて亦、老いて借なきの　いずれも

ＡＢＣよりはａｂｃのいずれぞ

ＡＢＣ対ａｂｃは反対語

Ａは副詞句・形容句　ＢＣは主語述語関係

徒然十語の二

我仏隣宝

もともと茶の湯に興味を持っていましたところ、クラブに茶の湯同好会ができた折に、手習いを始めましたら、やまい膏肓に入り、歓環荘无心庵を建てることになってしまいました。現物を見て同り書物も参考にした間取りも主水流です。命名の歓環荘の方はこの建物全体の名称で、歓環はロータリーという環・輪・和を楽しみ歓ぶという意味で、无（無）心庵の方は表千家の茶室不審庵の音にあやかってのことですが、今日のお客様をお送りしたあと一人静かに独座観念、無心の境地に遊ぶ願いを込めてのことです。

環を楽しみ無心で清寂に遊ぶのに、生々しい話題は御法度です。

伝千利休作とされる次の歌が面白い。

我仏　隣宝婿姑　天下戦　人善悪

わがほとけ　となりのたから　むこしゅうと

てんかのいくさ　ひとのよしあし

漢字ばかりのところがミソです。

宗派の論争、隣家の懐具合、我が家の愚痴こぼし、天下の戦さ評定、雨夜の品定め・・・。

これらの話題は、下世話に過ぎ、また、ようやく戦国乱世が収束しかけた当時の社会情勢からいって、余りにも生々しかったのでしょう。

どこにも、時と所に相応しくない話題や振舞いはあるものです。

◇◆　◇◆　◇◆　◇◆

紅旗征戎吾事に非ず

これはまた、新古今集の選者の一人、藤原定家が日記明月記のなかで、深夜、表で慌ただしい蹄の音がしているさ中、信念を込めて、こうきせいじゅう　わがことにあらず、歌道を守ることこそ吾が本分、と明記している言葉です。

三大歌集の一角を占める新古今を、今我々が手にすることができるのも、この気概とわきまえがあってのことです。

ところで、百人一首のなかで絶品中の絶品、ひとやま高く聳えるのは、やはり定家の次の歌だとひそかに思っています。

来ぬ人を　松帆の浦の　夕凪に　焼くや藻塩の　身も焦がれつつ

◇◆　◇◆　◇◆　◇◆

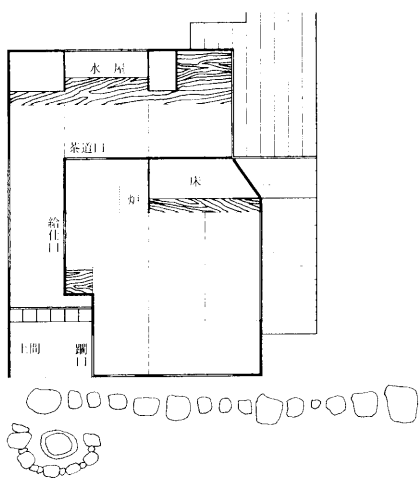
阿留辺幾夜宇和

ちょうど定家と同じ頃、場所も遠からぬところで、栄西が宋から持ち帰ったお茶の種を栄西から貰って、日本で初めて栂尾で栽培したと言われる、かの明恵上人（みょうえ・諱高弁）が京都栂尾高山寺で「あるべき様は」ということを説いています。人それぞれ地位・身分・職業等により、在るべき在り方、振る舞うべき振る舞い方がある、知分知足、その分を知り、役どころを知るべきであると自戒を込めて遺訓の中で

述べている言葉です。

「紅旗征戎吾事に非ず」といい、「あるべき様は」といい、我々も充分に自戒しなければなりません。ロータリーのあるべき様もおのずと判ってきます。

しかし、何事に付けても、余り杓子定規では面白くないかも知れません・・・。



徒然十語の三

還元祝と双六祝

私の生年月日は昭和一四年一一月一七日です。

平成一四年一一月一七日は昭和の元号が平成に替わって年月日が応当する日です。このように珍しいことは、一生に何回もあることはありません。運が悪いか良いか、応当年が無い人もいます。明治維新後一世一元制になって、初めてこのような応当が多くの人に起こることになりました。ただ、昭和三〇年頃以降の生まれの人たちに迄この好運が巡ってくる保証はありません。

普通の誕生日であれば、家族でおめでとうで終りですが、この応当日の誕生日は上記のように特別の有り難い日でしたから、私も、平成一四年一一月、同年の旧友の三人を招いて祝いました。

還元祝・還元祭（かんげんいわい・さい）と言います。

昭和二一年一〇月以降の誕生日の人は、これから到来する平成の応当日は満六三歳の特別の日ですから、忘れないように自分を祝ってやって下さい。

クラブでも特別に祝うようにすると面白い。

こんな話を平成一四年の時、例会でしていましたら、大正一四年生まれというその時七七歳の長老が、大正・昭和・平成の三つに応当することになるが・・と言われるので、こちらもとっさに、「それは非常に貴重な、大三元です。」と応答したことでした。

◇◆　◇◆　◇◆　◇◆

還暦六〇歳、古希七〇歳、傘寿八〇歳、卒寿九〇歳

（六六）　喜寿七七歳、米寿八八歳、白寿九九歳

これは、ご存じの通りの還暦後の長寿の賀ですが、六六歳が無いのが片手落ちの様な気がしてずうっと気に掛かっていたところです。数えの六六歳にまだなっていない人は、今から計画を立て同年の同憂の士を語らって双六祭・双六祝をやってみて下さい。

数えで六六歳になった年の六月六日が双六祝の祭日の当日です。

還暦の六〇歳・六一歳は若過ぎて祝う気分になれないでしょうし、そうかと言って、跳び着きから古希でも何ですから、六四歳位に予行演習をしておいてもよいでしょう。双六の祝をやって五年位後に古希の祝ならいい順序です。

双六ネクタイ・双六バッグ・双六ツアー・双六弁当・・・。

こんなお祝いのプレゼント、頂けるなら喜んでいただきますが、私はもう過ぎました。

徒然十語の四

三俳人の再評価

中学・高校以来、俳句は、芭蕉・蕪村・一茶の順に等間隔の頭差位の評価で叩き込まれていますが、どうも違うようです。

芭蕉は、今では単に芭蕉と言われていますが、死ぬ十年程前まで芭蕉庵桃青（とうせい）または単に桃青と名告っていたようです。

「奥の細道」の冒頭、「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。」は、李白の桃李園序の冒頭の「それ、天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり」に依っていることは、ご承知の通りですが、俳号「桃青」も、李白の「李」（すもも）には「桃」とならい「白」ならば「青」とならい、青二才ながら将来日本の俳諧を背負って立つ日東の李白たらんとする気迫が込められていました。気宇壮大な「桃青」という正式な俳号を忘れては、芭蕉を理解できないようです。

俗を離れながら俗に帰りて高悟に至ろうとする芭蕉、俗を離れながら俗を用いて尚美に至ろうとする蕪村。そして、俗を離れず俗に徹しようとする一茶。

「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫道する物は一なり。」と、桃青は一を俳諧において貫道しました。蕪村は後記の如く、その一を俳諧と文人両の融合した中に貫道し、一茶は素朴な自然体で、一を名前の中で貫いたようです。

芭蕉は生涯この一筋に繋がった俳諧においては蕪村に頭差以上に優っているとしなければなりませんが、詩中に画あり、画中に詩あり、俳と画を一に融合した境地の蕪村については、再評価をしなければならないかと思われます。そう見ますと、芭蕉と蕪村は僅差の二人ですが、この二人と一茶との差は随分大きいようです。

次に挙げる代表句からもその心の置き所が判りそうです。

芭蕉

○ 閑かさや　岩にしみ入る　蝉の声

○ 旅に病んで　夢は枯野を　駆けめぐる

蕪村

○ 夕風や　水　青鷺の　脛（はぎ）を打つ

○ 山は暮れて　野は黄昏の　薄（すすき）かな

一茶

○ めでたさも　ちう位なり　おらが春

○ やれ打つな　蠅が手を擦る　足をする

○ ともかくも　あなた任せの　年の暮れ

さて、その蕪村の再評価の事績ですが、蕪村は芭蕉と同じく漢詩文に造詣が深く、明和・天明期の俳諧復興の功績が大きいと言われるうえ、次のような功績を有してい

ます。

一つは、日本近代詩の先駆けとなった明治期の新体詩かと見紛うばかりの後記の晋我追悼曲（北寿老仙を悼む）という自由詩を書いていることです。江戸時代中期後半であることを考えると、驚嘆します。

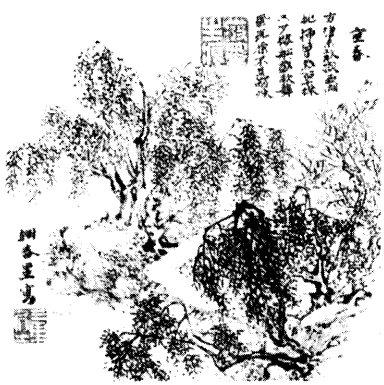
また、春風馬堤曲という俳詩もまた素晴らしく新鮮です。

もう一つは、以前から俳諧師の間で描かれていた俳画という新ジャンルを文人画の中の確立したことです。池大雅と競作した「十便十宜図」（じゅうべんじゅうぎず）は国宝に指定されています。水墨の夜色楼台図も捨てられません。

北寿老仙をいたむ

君あしたに去ぬゆふべのこころ千々に
何ぞはるかなる
君をおもふて岡のべに行つ遊ぶ
をかのべ何ぞかくかなしき
蒲公（たんぽぽ）の黄になずなのしろう咲きたる
見る人ぞなき

雉子（きぎす）のあるかひたなきに鳴くを聞けば



宜春（きしゅん）（十宜帖（じゅうぎじょう）のうち）与謝蕪村 筆

友ありき河をへだてゝ住にき
へげのけぶりのはと打ちちれば西吹く風の
はげしくて小竹（こざさ）原　真すげはら
のがるべきかたぞなき
友ありき河をへだてゝ住にき　けふは
ほろゝともなかぬ
君あしたに去ぬゆふべのこころ千々に
何ぞはるかなる
我庵（わがいほ）のあみだ仏ともし火もものせず
花もまいらせず　すごすごと佇める　今宵は
ことにたふとき

※　芭蕉が名古屋以西を旅した時は、鳴海の素封家で蕉風門の下里知足邸に度々宿泊したとの記録があり、また十便十宜図を蕪村に依頼したのは、知足の四代後の下郷（改名）学海と言われています。この地区報「奉仕の理想」の下郷編集長はその後裔です。

夜色楼台図（やしょくろうたい）　与謝蕪村 筆

徒然十語の五

ロータリーはモーツアルトの音楽のごと

北宋の第一の詩人・書家・政治家蘇軾（蘇東坡）が任地管轄内の西湖に遊んだ時、次のような詩を詠んでいる。

水光瀲艶晴方好　水光れんえんとして晴れてまさに好く
山色空濛雨亦奇　山色くうもうとして雨もまた奇なり
欲把西湖比西子　西湖をとって西子に比せんと欲すれば
淡粧濃抹總相宜　たんしょうのうまつ総て相よろし

晴れればさざ波が光り輝いてまさにいいものだが、山の姿がぼうっと煙っている雨の景色もまたいいものだ。この西湖をかの傾国の美女西施になぞらえるとすると、厚化粧でも薄化粧でも呉王夫差にとってはどちらも美しいのと同じように、私にとっても晴れても雨が降ってもどちらもいいものだ。

この詩は、発想の新鮮さと対比の妙により、既に江戸初期には相当に文化人に膾炙していたようで、芭蕉も、奥の細道の象潟の条で「松島は笑ふが如く、象潟は恨むが如し」と叙して、

象潟や　雨に西施が　ねぶの花

と、この「晴好雨奇」の詩の空濛の中の西施の姿を思い浮かべながら詠んでいる。

蘇東坡の号に繋がると思われる、西湖に自身が築堤した「蘇堤」やそこに架けられ

広島縮景園

た石造りの半円程の「偃月橋」（えんげつきょう）も、水戸藩中屋敷の後楽園庭園や広島の縮景園に取り入れられている。

つい先頃、平成16年に改修開園された尾張徳川家の徳川園の池泉回遊式日本庭園の中にも、両側に池を間仕切るように細長い堤が設けられ、その堤の中程のところに形の変わった石造りの橋が架けられた。その橋は随分と日本式に変形されて三日月橋のようなのが残念だ。これも現代版。心は「偃月橋」である。

随分長い導入で恐縮の極みだが、こと程左様に、蘇東坡とこの詩は日本に浸透していた訳である。

私もこの詩の遊び心に誘われ、戯れに、ロータリーを、付き合いの古いバッハ・

ハイドン・モーツアルト・ベートーベン等の音楽になぞらえるとすると、ロータリーに一番雰囲気的にぴったりするのは、モーツアルトの曲だ。ピアノ協奏曲の「戴冠式」、フルートとハープのための協奏曲等は優雅であるし、弦楽四重奏「アイネクライネ」を聞けば軽快な気分にもなる。どの曲も無邪気で天衣無縫、屈託がない。心が安まり気分が落ち着き、いつまでも飽きが来ない。バッハのように生真面目一本でなく、ベートーベンのように無欠で、長く付き合うと精神が疲れるということもない。

ロータリーはまさにモーツアルトの音楽のようであり、またそのようでありたい。親睦の楽しみと奉仕の歓びを、大らかにゆとりをもって程よく雅びに。一言で言えば、悠裕雅に・・。そのようなのがロータリー的な流儀・作法である。

徒然十語の六

我亦在彼摂取中

ガヤクザイヒセッシュチュウ＝我も亦、かの阿弥陀仏の摂取のうちに在り＝我もまた阿弥陀仏の救済の計らいのうちにあり

昔から朝あした題目に夕念仏と言われていたようです。朝には南無妙法蓮華経と唱え、夕には南無阿弥陀仏と称える。彼岸は西方浄土ですからどうしても夕念仏になります。これからみると、昔の人は信心深かったようです。また、宗教の寛大な多様性というべきでしょうか、多神教の民族性というべきでしょうか。

ところが、現在はどうでしょう、その時間的余裕も精神的余裕もなくなってきました。

私も、毎月の命日や親戚の法事に、判らないお経を聞いているということが無駄なように思われて、ちょっと気を入れて読み出したお経の中に、心を打つ一節を見つけました。

親鸞聖人の手になる「教行信証（キョウギョウシンショウ）」という書の中に七言一二〇句からなる正信偈（ショウシンゲ）という一文があります。

「帰命無量寿如来」で始まるご存じの四拍子の調子のよいお経です。日本では「色即是空・空即是色」の般若心経と双璧の短いお経ではないかと思います。

冒頭の掲句が、正信偈の後半に出てくる何でもない一節ですが、殊に心に響く一行

です。

線香の匂いのなか、生滅を考える常にない一瞬。「我亦在彼摂取中」の一行を読経の聲が通り過ぎる時、一生懸命生きている我も亦、かの阿弥陀様に忘れられ見捨てられてはいないのだ。我もまた諸々の人たちと一緒なのだという何とも言えない一体感・安堵感。不思議な一瞬です。「我亦在此共生中」

家族もこの一体感から始まります。企業でもそうです。ロータリーの各クラブも会員も、ロータリー愛知82のかけがえのない一員、皆一体です。きっと、この一体感がロータリーの不断のエネルギーの源泉なのでしょう。

徒然十語の七

七清華

摂政・関白、太政大臣まで昇ることのできる五摂家といえば、近衛・九条・二條・一条・鷹司の五家であるということは直ぐに言えるかもしれませんが、七清華・九清華となると中々思い出せません。

久我・三条・西園寺・徳大寺・花山院・大炊御門・今出川（菊亭）の七家です。後に江戸初期に広幡・醍醐の二家が創設されました。太政大臣までなることのできる家柄です。

幕末維新の変革時において、公家の中で首魁となって最前線で主導したのは五摂家よりも三条・岩倉・中山・正親町三条等の清華家以下の家柄の人達でした。

西南の役を乗り越え基礎の固まった新政府が、いよいよ、「広く会議を興し万機公論に決すべ・・」き民選議員による国会を開設するに当たって、その対抗手段として二院制による上院としての貴族院を構想し、その準備として、明治一七年七月、華族令により華族制度が公侯伯子男の爵位と共に制度化されました。

その中で、五摂家が公爵に叙爵されたのに対し、九清華家は侯爵に叙爵されました。五元勲の一人三条実美は清華家で侯爵のところ、勲功顕著なる者との内規により、岩倉具視家と共に公爵に叙せられました。西園寺家も後に西園寺公望の勲功により、徳大寺家も徳大寺実則（公望の実兄）の多年の功により公爵に陞爵しょうしゃくしまし

た。

明治一七年、最初の叙爵時に公爵に叙せられたのは、公家は右の七家、武家は徳川将軍家と、薩摩の藩主島津家と勲功内規による島津久光の島津別家、長州藩主の毛利家の三家の合計一一家でした。五元勲の木戸孝允（桂小五郎）・大久保利通・西郷隆盛は三人とも明治一七年時点で死亡していたので、前者二人はその時のそれぞれの当主に勲功諸士の第一号の飛び付け侯爵に叙されました。西郷隆盛家も西南の役による朝敵の汚名が許され勲功により明治三五年に侯爵に叙されました。

と同時に・・。徳川将軍家は徳川宗家として右のように公爵に叙されましたが、最後の将軍徳川慶喜は、時が経ち天皇治世が安定したと考えられ、徳川別家として公爵に叙せられました。また、無血の中で幕府の幕を引き慶喜を最後の将軍とした、維新に勲功ある勝海舟は明治二〇年に伯爵に叙せられ、「昨日キノウまで並の男と思いしに五尺に足りぬ子爵なりとは」と不服を言ったと揶揄されながら、自身は慶喜の子を養子として勝家に迎えて伯爵家を譲り、徳川家に対する積年の心の痛みを和らげたと伝えられています。

◇◆　◇◆　◇◆　◇◆

六古窯

平安・鎌倉時代から栄えた国内六つの陶器産地を六古窯（ろっこよう）と言うんだそうですが、愛知県は歴史的に窯業の盛んな地域で、陶器の普通名詞となった瀬戸物

の瀬戸、そして六古窯のうちで販路が最も広かった常滑焼の常滑と、六古窯の中に二つも入っています。

昔から陶器製作のツボを「一土二焼三細工」と言うようですから、愛知県内には良質の陶土を産したということでしょうし、焼成に何か秘法があり、成形・絵付けの技術にも優れていたのでしょう。瀬戸・常滑の前身でそれらに影響を与えた猿投古窯や渥美古窯も近くに有りますし、瀬戸と山一つ隔てた多治見を中心とする志野、織部、黄瀬戸の美濃焼の産地も隣り合わせです。

六古窯の他の四つは、越前、信楽　丹波　備前です。

六十の坂を越えると、何事も三つまではいいが四つ以上を何の脈絡もなく覚えておくということが難しくなってきます。まして双六・古希を過ぎると一つことを覚えておくことさえ至難です。・・・・・・。

六古窯は、東から西へ「瀬戸へ下火」と覚えておくと便利です。せ瀬戸・と常滑・え越前・し信楽・た丹波・び備前。

六古窯がわかると、何でも鑑定団の中島誠之助先生の解説が聞き応えがあって面白くなります。

◇◆　◇◆　◇◆　◇◆

京都五山

日本の芸術文化の何割かの部分を仏教文化が形作っているように思われますが、中

でも中世鎌倉・室町の禅宗が武士に与えた影響が、天台・真言が公家に与えた以上に大きいように見えます。その禅宗諸山の中でも室町幕府統制下にあった五山十刹の臨済禅の影響が大きいように思われます。

鎌倉五山に対する京都五山は、開基足利尊氏開山夢窓疎石の霊亀山天龍資聖禅寺・開基足利義満開山春屋妙葩の万年山相国承天禅寺・開基源頼家開山明庵栄西の東山建仁寺・開基九条道家開山円爾弁円の慧日山東福寺・京城山万寿寺の五か寺ですが、この五山の上に「五山之上ござんしじょう」という格式を作り、開基亀山上皇開山無関普門の瑞龍山太平興国南禅禅寺を据えています。他に幕府による格付けを好まなかった大徳寺・妙心寺の二大寺があります。「天竜寺の算盤面」「相国寺の声明面」「建仁寺の学者面」「東福寺の伽藍面」などと言われながら、それぞれ特色を持って現在に繋がっています。

五山制度は幕府が変遷を経て定着した格付けですから、先の順番で挙げる必要があります。開基を基準にして、天皇開基を最上とし、武家の世でしたから武家開基が公家開基の上にきています。

五摂家でも御三家でも順番のあるものはその順に挙げなければ知識の上滑りになってしまいます。五摂家を一条・二条・九条・近衛・鷹司と、無頓着に挙げている本がありますが、画数の順なのでしょうか。

◇◆　◇◆　◇◆　◇◆

四親王家

日本歴史の時代感覚を掴むには、西暦年と天皇一二四代を覚えるに如かず、神武・綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝霊・孝元・開化・・称光・後花園・後土御門・後柏原・後奈良・正親町・後陽成・後水尾・明正・後光明・後西・霊元・東山・中御門・桜町・桃園・後桜町・後桃園・光格・仁孝・孝明・明治・大正・昭和と苦労して覚えたが、自ら進んで覚えたものや、理由の如何を問わず若い時に覚えたものは、何年経っても身に着いて現役である。

随分と日本歴史に接するのに役立っていて、この記憶に大いに感謝している。

この男系の男子の万世一系の持続可能な継承を担保するために、古くから、代々、上皇・天皇の猶子（養子ではないがなお子の如し）となって親王宣下を受け、世襲の男系男子の親王家が数家創立され継承されてきていた。しかし、その親王家自体が男系の男子の養子を含めて男系の男子を得られないということがしばしばあって、明治維新時には、室町時代に成立した伏見宮家、安土桃山時代の桂宮家、江戸初期の有栖川宮家・中期の閑院宮家の四家が存続していたに過ぎない。四親王家という。うち、伏見宮家と閑院宮家は終戦直後の臣籍降下まで、明治年間に創始された他の十一家の宮家と共に継承された。

天皇の万世一系が危殆に遭遇したことがこれまでに三回あった。最初は、歴史時代以前の二五代武烈天皇から一五代応神天皇五世の孫の二六代継体天皇への継承の時、

次は、一三九二年南北両朝統一後の一〇一代称光天皇から北朝三代崇光すこう天皇三世の孫一〇二代後花園天皇への継承の時、三度目が、江戸時代の一一八代後桃園天皇から一一三代東山天皇三世の孫一一九代光格天皇への継承の時である。

このうち、二回目の時は伏見宮家から、三回目は閑院宮家から、天皇が立った。宮家は役割を充分に果たしたのである。

男系の男子の万世一系でなくても、ある家系が一五〇〇年以上に亙り継承されてきた事実自体が大変な希有の事柄であるのに、記録時代に入って、それも男系の男子の家系として継承されてきたというのはまさに奇跡であり、この故のみを以てしても後世に伝えていきたい天皇家のみならず日本人共有の世界的文化的制度である。

◇◆　◇◆　◇◆　◇◆

御三家

徳川御三家のことです。家康九男の尾張家・十男の紀伊家・十一男の水戸家です。石高は尾張家六一万九五〇〇石、紀伊家五五万五〇〇〇石、水戸家は三五万石。極位極官は尾張・紀伊両家とも従二位権大納言、水戸家は従三位中納言。江戸城詰所は大廊下です。

御三家筆頭尾張徳川家は、加賀前田家の一〇二万石、薩摩島津家の七三万石、仙台伊達氏の六二万石に次いで六一万九五〇〇石、この外に美林の木曽領を有し、諸大名から羨まれた程の名古屋城を構え、江戸尾張藩下屋敷には戸山荘と呼ばれ当時江戸一

と言われた一三万坪を越える広大な大名庭園を有し、「尾張名古屋は城で持つ」と人材無きが如く言われていましたが、幕末には、島津成彬・伊達宗城・山内容堂・松平春嶽の四賢侯に亜ぐと言われた徳川慶勝は第一次長州征伐の征長総督としてその任を果たし、次弟京都守護職会津藩主松平容保・三弟京都所司代桑名藩主松平定敬らと共に公武合体派として活躍し、倒幕の勅令が出た後は弟らと袂を分かち勤皇派として活躍しました。

爵位は尾紀水とも侯爵です。水戸家は後年昭和に入って、光圀・斉昭の功により公爵に陞爵しました。

◇◆　◇◆　◇◆　◇◆

両家付家老

尾張徳川藩には、万石家老が五家あり、そのうち、二家は幕府から付けられたいわゆる付家老の成瀬家三万五千石（在所尾張犬山）と竹腰家三万石（たけのこし在所美濃今尾）である。他の三家は渡辺家一万〇一八〇石、石河家いしこ一万〇〇一〇石、志水家一万石である。併せて両家三氏という。志水家は初代藩主義直の実母相応院の実家（名古屋市緑区大高）である。

この他、高禄の家臣は五七〇〇石の山村氏、四四〇〇石の千村氏ちむら、各四〇〇〇石の成瀬氏・横井氏・生駒氏・織田氏・山澄氏以下一〇〇〇石まで六五家あった。（江戸中期）

このうち、山村氏と千村氏は、木曽領が尾張藩に幕府から編入された時に木曽代官の役持ちのまゝ尾張藩に配属された木曽衆で、直参旗本の身分と尾張藩家臣の陪臣の身分の両方を有し、将軍代替りにお目見えと朱印状下賜の特権を有し、江戸にも幕府から屋敷を拝領している特別の家臣であった。

成瀬・竹腰両家は、紀州藩付家老の安藤家三万八八〇〇石・水野家三万五〇〇〇石、水戸藩の中山家二万五〇〇〇石と共に五家団結して請願した結果、明治維新後晴れて付家老であるとともに独立した犬山藩・今尾藩藩主たることを認められ、明治一七年の叙爵時に間に合って元藩主として男爵（江戸時代からの元大名は一万石でも子爵）に各叙せられた。成瀬氏は後に維新の勲功により子爵に陞爵している。三氏のうち渡辺家と石河家は更に後れて元尾張藩家老として男爵に叙せられた。

徒然十語の八

詩歌のリズム

お正月の焼餅の芳しい溜まりの匂いに、つい百人一首の断片がひゃくにんしゅの調子で自然と口を衝いて出ます。所により違いがありますが、僅か六度の音程（ドからラのまでの音程）内の抑揚の少ない緩やかなリズムです。五と七との組合せで出来た日本の詩歌の伝統形式です。

不思議なことに、短歌は三十一文字（音）俳句は十七字（音）、しかもいずれも五字句・七字句で、短歌はそれらを五句、俳句は三句の組立でできており、数学でいう素数ばかりで出来上がっています。不思議といえば本当に不思議です。

絶句・律詩の漢詩も五言・七言です。

これら短歌・俳句等の調子の良さは、まさかその素数性から来るのではないでしょう。もし、割り切れない素数が、区切れを本質とするリズムのよってきたる素因だとするならば、心理学者の見解を聞かなければならない。

短歌・俳句の韻文性は、五字七字の字数音数から来るものではなくて、五字・七字が創る音節拍と休止拍による調子によるものと考えられます。

一つ確認しておきましょう。

百人一首の紀友則の

久方のひかりのどけき春の日に　しづこころなく花の散るらむ

の歌が調子のいいことは短歌ですからとうぜんですが、

憂いつつ　丘に登れば　花いばら
故郷の道に　似たるかな

この歌の調子はどうでしょうか。五七五・七七と違って、五七五・七五と短歌とは違う五と七の組合せの形ですが、違和感は全然ありませんでしょう。（実はこの歌は、蕪村の俳句二句を、一句の下五と他の句の上五の同じ言葉の「花いばら」を重ね併せて縮めたものです。）

試みに、句頭の「憂いつつ」を外して、七五・七五の形

丘に登れば　花いばら
故郷の道に　似たるかな

としたらどうでしょう。これなども、なかなか行けます。俳句よりいろいろな面で利点があって、俳歌という新種ジャンルができそうです。

焦点は、これらの歌の調子の良さの原因です。何なのでしょう？

その理由は、紙数の余裕がありませんから結論を先に言いますと、通常日本語は二字二音（時には三字三音のことがある）で一拍を形成し、当然、一字一音は半拍ですが、その一音が他の一音を伴なわない時は自身の半拍とそれに半拍の休止を伴なって併せて一拍を形成します（あるいは端数の一音は長音となって一拍となるといった方が良いかもしれません）。

詩歌の五字句・七字句は、常に最後に半拍休止を伴なって、五字句は三拍あり、七字句は四拍あります。

しかし、ここが微妙なところですが、五字句は三拍目の後に更に一拍の休止が自然に必ず入ります。都合四拍です。

七字句の方は一拍の休止はなく、次に句がある時は右四拍目の半拍の休止のみで一拍の休止なく直ぐ次に続きます。次に続かず句が終了する時は、右の半拍の休止だけで一拍の休止はありません。

ですから、五字句も七字句もどれも四拍となっています。

そして、四拍・四拍子で読まれる訳です。音楽で言えば、四拍・四拍子で一小節です。短歌は四拍・四拍子の小節（句）が五小節（句）あるということですし、俳句は四拍・四拍子の三小節（句）でできているということです。

以上のように、五・七の字数の句は、知らず知らずにすべて四拍で読んで調子を整えています。すべて四拍子で読んでいます。この調子が和歌の韻文である核心です。

そうしますと、五字七字というのは字数は視覚的な現象であって、四拍であれば六字でも八字でもよく、字余り・字足らずと異端視するに当たらないということが判ります。

そしてまた、短歌が五七五七七の四拍子五句で成り立ち、試みに挙げた仮称俳歌が七五七五の四拍子四句でできていますが、音楽において四小節で一楽節を構成するこ

とから考えますと、短歌の五小節よりも俳歌の四小節の方が音楽理論に近い感じがしますが、音楽と韻文との超え難い違いがありますから、そうとは言い切れません。短歌の場合の最後の句の七字は四拍目に半拍の休止があるだけで全体の一首が終わりますが、余韻に乏しいように感じます。俳句・俳歌の下五の五字には充分な一拍の休止があって、それだけ余韻が深い感じがしますが、どうでしょうか。

さあ、お正月をキリッと締めましょうか。三三七拍子で‥。いや四四・四四拍子で‥。

徒然十語の九

名古屋城検定

公式訪問と地区大会が終わって心の重しの取れた長閑な貴重な一日、近頃流行りの観光検定の一つ、名古屋城検定というのを受けてきました。事のついでの探訪が嵩じた趣味の城です・・。

ご存じの様に、現在、愛知県内に建造物の国宝が三つあります。吉良上野介の領地三州吉良町の曹洞宗金蓮寺弥陀堂、あと二つはいずれも犬山市にある犬山城と織田有楽の茶室如庵じょあん（戦後愛知県内に移築）。金蓮寺弥陀堂は鎌倉初期の寺社建築、犬山城は桃山期前の城郭建築、如庵は江戸初期の草庵風数寄屋建築です（焼失前国宝名古屋城本丸御殿は武家書院造り）。

全国の城郭で天守閣の現存する城はわずか一二城、その中で国宝となっているのは、姫路城、彦根城、松本城、それに犬山城です（二条城天守閣は一七五〇年頃に焼失し、二の丸御殿が国宝）。明治維新・幕末動乱期まで健在であった天守は六五城。それを乗り切って今次大戦開戦まで現存した天守は一九。大戦中に焼失した天守は立派なものばかり、七城。和歌山城・水戸城・広島城・岡山城・大垣城・福山城、それに名古屋城。

昭和五年城郭建築として本丸御殿とともに国宝第一号に指定された名古屋城は、昭和二〇年五月一四日正午まえ、終戦をわずか三カ月後にして、天守閣・本丸御殿ともに永久に雄姿を消しました。

惜しい限りです。

その名古屋城を簡易鑑定してみましょう。

1江戸城（三度建替え）・大坂城（豊臣期と徳川期）二条城等が徳川期の早くに焼失した中で、唯一名古屋城は大城郭として、築城以来今次大戦終結時まで三〇〇年以上に亙り天守・本丸御殿揃いで存続してきた城であること。（天守は昭和三四年再建、本丸御殿は現在再建中）

2名古屋城は城郭建築史上普請・作事において最高の完成度の域に達した天下普請による城であること。

○現在、名古屋開府四〇〇年を期して再建中の名古屋城本丸御殿は床・棚・付書院・帳台構の座敷飾りを備え、壁・襖・杉戸には金碧障壁画等が描かれ、天井は二重折上格天井で、二条城二の丸御殿と共に武家書院造建築の双璧であり、その建築・絵画・工芸等美術的価値において（江戸城・両大坂城・安土城を除き）他に追随するものがなかったこと。

○内堀に囲まれた本丸の四隅の一角に小天守を従えた大天守を置き、他の隅には一つの三重隅櫓と二つの二重隅櫓を置き、それぞれを長大な多聞櫓（妻側三間の長屋様の建物）とで繋ぎ、広大な約一万坪の本丸を構成している大連立様式であること。他に二條城・大阪城等の例があるのみ。

○各郭への出入り口の枡形虎口は多聞櫓で三方を囲み、櫓門と高麗門で固め、更に

二つある本丸枡形は日本最大の馬出しで防禦されていること。

○二の丸御殿内には池泉回遊式の広大な庭園を備え、城郭内庭園として他に例がないこと（外堀北側一帯にも数万坪の庭園があった）。

○尾張藩木曽領の良材に恵まれ天守・御殿とも松・杉を控えて良質の無節の檜が大量に使用されていること（天守一階の隅柱は四一センチ角、管柱も三七センチ角（他城は三〇センチ以下、現在の一般住宅は一〇・五センチ）と特太の柱）。

○天守閣の全体の美しさは白鷺城姫路城に一歩を譲るにしても、彦根城・松本城に劣らず、早く焼失した江戸城・大坂城にも優るものであること。

3　総合的に、名古屋城天守閣の全体の美しさは、一・二階とも南北一七間（一間は七尺）東西一五間、三階一三間一一間、四階一〇間八間、五階八間六間という逓減率（四間・三間・二間）、一・二階は却って逓減なしとなっている均斉、白亜の漆喰壁に緑青の噴いた銅板瓦の上品な対比、その上に二メートル四〇センチもある金の鯱鉾の燦然たる黄金の輝き（金鯱は江戸城・大坂城のみ）、四面に取り付けられた最多の入母屋破風・千鳥破風・唐破風、四隅の屋根の適度の反り上がり、最上階の窓の上下の長押（なげし）風の装飾、石垣・建物の高さ・横巾の釣合い等々の総体的なものによるものである。

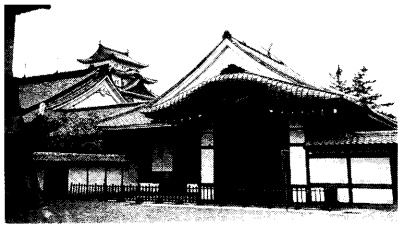
4　さて、少々勇み足にわたるけれども、すべての城の総合順位の十傑を選定するとすれば、議論の余地なく、一位江戸城、二位大坂城、三位名古屋城の順位。この順

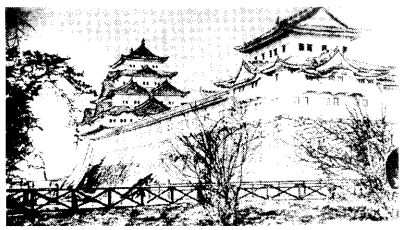
位は動かし難い。

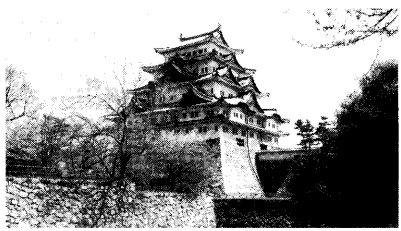
四位以下が難題ですが、四位は豊臣大坂城、五位は安土城、六位は二条城、七位は姫路城、八位は熊本城、九位は駿府城、十位は彦根城。松本城・広島城・岡山城・福山城・・・は次点で我慢を乞う。

今は無いという理由で除外して現存の中だけで評価するのは、本当の意味において検討したということにはならず、真実かどうかの保証はなく、何よりも、心ならずも姿を消したそれらの城に公平でもありません。当時の関係者を含めて好意と友情を深める由縁にもなりません。みんなの勉強のためにもなりません。

陽気が良くなりましたら、一度、ご案内致しましょう。







徒然十語の十

防　毛　録

ボケロクではなくボウモウロクと読む。周防の毛利氏の記録ではない。耄碌を防ぐボケの備忘録という意味である。

一行一センチ余の縦罫の厚さ二センチばかりで教科書大の和綴じの厚表紙のもので、主として仕事用のものであるが、毎日の繰り越し仕事や予定、思いついたことは何でも書き込まれている。昭和四九年が始まり、今では全部で二〇冊ばかりである。

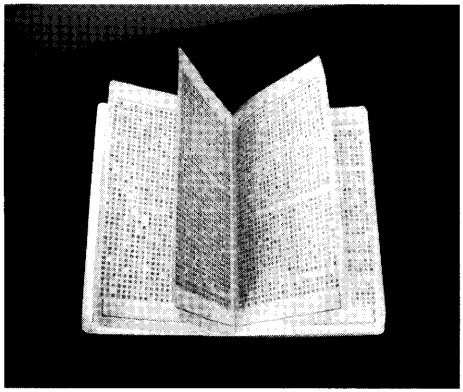
今見ると、その表題には色々苦心した跡が見て取れる。無題のものや単に備忘録と記載されたものに混じって、「忘れ誌」（誌に濁点が振ってある）「忘れがた記」「聴月」「御稚音簿」（おちょんぼ）などと面白いのがある。お終りの方のものは歳相応に全部「防毛録」に定着し現在に至っている。

買いだめの和綴じ本はあと一冊だけ。それが満杯になったら、本当に我が一巻の終りの時である。

別にもう一冊、訟廷日誌というB6版ほどの厚さ一センチ位の大振りの手帳を肌身離さず重用している。これも弁護士登録をした昭和四三年版から一年も欠かず書棚の奥の方に保管されている。

五九年版以後の手帳の、最初と最後の各数頁は、自分で作ったものやら有り合わせのものやら、参照すべき事項をびっしりと印字した用紙が糊で張り付けてある。年々

張り付ける用紙が多くなって、今年度版には愛知県弁護士会歴代役員表　歴代ガバナー・地区幹事・ガバナー補佐（分区代理）一覧　当年度地区役員及び委員会構成名古屋東南歴代クラブ会長・幹事等一覧表　定款　同細則　理事会・委員会等構成表　年度例会プログラムなどの弁護士会、ロータリーのものは便宜のため、天皇系図名古屋城図　尾張藩家臣表大名表　般若心経　正信偈　漢詩集　世界指揮者名集オーケストラ集などは人間向上のための涙ぐましい暗記用。珍重すべきは細字のよろず集。参考までに一覧に供す。



奉仕の理想

―ロータリーの心と形―

R－第２７６０地区ロータリー愛知８２
２００８年度ガバナー
片山 主水